

センタージャーナル

■発行人／荒山 淳

■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター

〒460-0016
名古屋市中区橋二丁目8番55号
TEL (052) 323-3686
FAX (052) 332-0900



電信柱が倒れるがれきの中に水仙が花を咲かせていた。(岩手県宮古市の浄土ヶ浜・5月初旬)

立つ！
いのちの大地に
聞く！
いのちの叫びを

真実の学びから、
今を生きる「人間」としての
責任を明らかにし、
ともにその使命を生きる者となる。

もくじ

- ・ 講義抄録「真宗儀式の教相」 ②・③
- ・ 東日本大震災 復興支援活動報告 ④
- ・ 大谷派の戦争協力 ⑤
- 戦場慰問と宣撫工作 -
- ・ 親鸞聖人御旧跡レポート ⑥・⑦
- ・ 研究生実習報告-葬儀って必要?- ⑦
- ・ ライブラリー紹介 ⑦

◆ 挟み込み(※寺報などにご利用ください)

境界に立つー想定外をめぐってー

71日間におよぶ宗祖親鸞聖人750回御遠忌法要が円成した。参拝された方々は、それぞれに様々な出遇いと思いを残されたことだろう。私自身を振り返れば、3月11日に突如として発生した震災によって、これまで思い描いていた華々しく荘厳された御遠忌の想定が打ち砕かれたことが思い返される。

私にとつての御遠忌法要も、まさしく想定外の御遠忌法要となったわけだが、このことにより、常に自身の勝手な想定を抛りどころにしている私の正体が明白となった。

震災以来、今年の流行語大賞は「想定外」と言わんがばかりにこの言葉が飛び交った。以来、この想定外は、世界中の原子力発電所のあり方を揺るがし、政治・経済を疲弊させ、戦後の日本が築いてきた安易な想定もすべてのみ込んでしまった。しかし、「想定外」の出来事が、自分勝手な希望的憶測と無自覚な我欲にしがみついていた私の日常を浮かび上がらせたのである。

御遠忌法要に被災地から届けられた御門徒のメッセージ、「津波にのみ込まれた我が家、わが町の残骸の中に水

仙の花を見つけ、これまで何も感じなかった御遠忌テーマ『今、いのちがあなたを生きている』が響いたが、忘れられない。また、本紙4頁の間氏のボラティア報告に紹介いただいた「津波に会えたことにもありがとうと言いたい」には衝撃を受けた。まさに、水仙の如く東北の大地にしっかりと根をはったお二人の生き様に大いに励まされたことである。

お二人が感じた大地・大海の想定外の不可思議さへの「感謝」とは裏腹に、目先の欲望と引き換えに無関心を装って放置してきた原発問題。大地・大海のすべての「いのち」、そして、これから芽生えるであろう「いのち」への「ごめんなさい」からしか歩みははじまらないのではなからうか。

もはや、疲弊した私の想定内からは何も生み出すことは期待できない。私の口から称えられる念仏も、まさしく「想定外」のはたらきだったはずである。私の想定の内と外との境界に立て。このたびの宗祖御遠忌、東北の悲しみから、今、私が問われている。

(教化センター主幹 荒山 淳)

講義抄録

2011年3月4日

〈研究生「教化研修」〉
「真宗儀式の教相」

たけはし
竹橋

ふとし
太
(本廟部出仕)

第7回

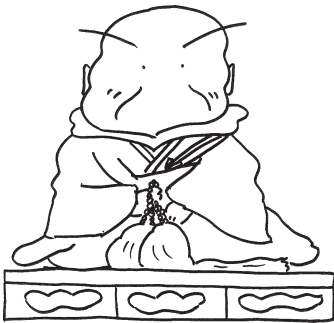
親鸞聖人はどちらを向いている？

つては阿弥陀という真実の方向から与えられてくるもの、回向されるものであり、親鸞聖人にとってはお念仏そのものの表現であるということです。

私たちがお念仏する時は、親鸞さまも阿弥陀さまの方を向いて一緒にお念仏しているというわけです。けれども、それを教えとして説いてくださったということが、形として私たちの方を向いて座っていらつしやるということに表されています。

私たちは、一つの物の見方しかできないので、なかなか受け取り難いことです。ですからこちらを向いている親鸞聖人 hands を合わせるの、貴人崇拜であるという人もいます。私はそうは思いません。いまのかたちのままで、一緒にお念仏も

本山の御影堂の親鸞聖人の御真影は、お厨子の中でお念珠を持ち礼盤のうえに座っていらつしやいます。その像に向かつて、我々は手を合わせているわけです。礼盤に座っているということは、私たちがの方を向いてはいますが、阿弥陀さまに向かつて念仏している御姿なのです。また、我々は親鸞聖人を通してお念仏の教えをいただき、南無阿弥陀仏と称えています。親鸞聖人は、我々にとっては宗祖として教えを説いてくださった方ですから、御真影は今現在説法のすがたであり、こちら、私たちの方を向いています。では、お念仏を称えているのか、説法しているのか。どちらが本当なのでしょう。私はそれが同時になされていると考えています。なぜか、それは繰り返すようですが、お念仏しているからです。つまり、親鸞聖人が礼盤に座って阿弥陀如来に向かつてお念仏を称えている姿が、私たちには説法していることになる、ということ。親鸞聖人は、両方に向かつているのだと思います。教学的に言えば、親鸞聖人の御説法は、私たちに



このように一つのものに二つの方向を見ると言うようなことは私たちにはわかり難い。「自分があって」「その意思がどうであるか」、そういう前提で話すことができないのが私たちの有り方です。すべて善悪、好悪と言った形で自分との関係を作るしかない、分別でしか生きられないのです。「生かされている」というのはまさにそれとは反対の立場です。「縁起している」「空である」、また「無我」というのもまさにそのことを問題にしているわけです。『毒矢喻経(どくやのたとえ)』という別名を持つお経があります。

- 1) 世界は常住であるか
- 2) 世界は無常であるか
- 3) 世界は常住であり、かつ無常であるか
- 4) 世界は常住ではなく、かつ無常でもないのか
- 5) 世界は有限であるか
- 6) 世界は無限であるか
- 7) 世界は有限であり、かつ無限であるのか
- 8) 世界は有限ではなく、かつ無限でもないのか
- 9) 生命と肉体は同一であるか
- 10) 生命と肉体は別であるか
- 11) 人は死後存在するか
- 12) 人は死後存在しないか
- 13) 人は死後存在し、かつ存在しないのか
- 14) 人は死後存在せず、かつ存在しないのでもないのか

(『阿含経』「中部経典No.63」『マールンキヤプッタの問い』)

うしているということはできるのです。親鸞聖人を宗祖として仰ぐという時には、一つの方向だけで言い切れないものがあります。親鸞聖人を諸仏の一人、師として見る。だからこそ、もう一つはやはり御同行として見る、また見て下さっている、そういう感覚が御信心の一面であると思います。

毒矢がささったままの私たち

迦さまが答えを出さなかった14の質問(十四無記)です(表参照)。これは当時インドに現われたたくさんの新しい宗教を、いわば試すための質問だったようです。この問題にどう答えるかが、その宗教の特徴を示すのです。

尊者マールンキヤプッタは夕方、静思の坐より起ち、世尊のもとに参上した。世尊に近づいて礼拝すると、尊者マールンキヤプッタは世尊に向かつて下座にすわり、世尊に言った。「世尊よ、この私が静かな場所であり瞑想にふけていたとき、次のような考えがおこりました。次の十四を示してください。もしこの十四の命題を放棄して、世俗の生活に還ることになったら、このような考えがおこったのです。もしこの十四の命題

をご存知ないのなら、知らないことは知らない、わからないことはわからない」と。お釈迦さまは珍しくお怒りになりました。「おろか者よ。お前はいつか自分を誰だと思つて修学を拒もうとするのだ」と。

これに対して、お釈迦さまは珍しくお怒りになりました。「おろか者よ。お前はいつか自分を誰だと思つて修学を拒もうとするのだ」と。

お釈迦さまはこの質問には答ええない、そういう立場を明らかにされました。11から14を見てください。いまでも私たちはこれらがはつきりしないから、浄土に往生するということが言えないのではないですか。11は生死輪廻の立場、つまり靈魂論です。釈尊は常見(常に「我」が有るといふ見)魂が永遠に生まれ変わるといふ考え方)と言われます。12を断見(「我」が死によつて断絶するといふ見)死んだらおしまいといふ考え方)と言われます。これは有無の二見と言われる迷いの典型なのです。浄土真宗の僧侶はこの12の立場の人が多いのではないかと思っています。どうでしょうか。なぜ迷いなのか。答えは簡単です。この11から14は「我が有る」といふことが前提になつています。我があつて続くか終わるかといふことなのです。この14の質問全体が、私がいって世界を見ているといふ前提に立っているのです。それ自体が問題なのです。この經典では、この14の質問に答えないこと、釈尊は自分の立場を示したのです。

つまり無我といふことです。それは「私がない」といふことではなくて、「私はご縁に依つてそのときそのとき生じている」といふことです。いましかないのです。「私がいってご縁を頂く」のではなく、「ご縁がいま私になつてくださっている」と

いふことです。2歳のときの私といふのは違います。しかしそれが続いていると思うのが、私たちの普通の考え方でしょう。

この經典では続いて、マールンキヤブツタのすがたは毒矢が刺さっているにもかかわらず、その毒矢を抜きもしないで「この毒矢は何でできているのか」「誰が射たのか」といふことを言っているのと同じだと説かれます。「人は死後存在するのか、しないのか」と言っている前提になつていふのは誰かといふことです。そう「私」です。「私」がいって、それを理解しなければ、仏教を信頼できない。そういうことを言っているわけでしょう。私の存在を確固としたものとして疑いもしない、そしてそういう自分がどうなつていくのかといふ方向でしか、ものを考えることが出来ない。だから、そのように言っている「私」が毒矢なのだといふのが、お釈迦さまのこたえです。「お前はいつか自分を誰だと思つているのか」といふ言葉はまさにそういう



ことを示しているのでしょうか。そういう「私」がいるといふこと、「これが無明です。私たちが気付いていない」「私がある、世界がある」といふ前提が、そもそも問題なのです。そのことを問わすに、私たちは自分の善悪で教えを聞いているのです。

生かされているといふことから言えば、自分だけで自分の意味は決められないといふことです。私たちの有り様は自分の思いを超えているのです。私たちが行う儀式が仏の説法になるといふことは、まさにそういう縁起的存在であるといふ前提から考えなくてははいけません。

儀式そのものが仏の説法をあらわしている

このように十四無記を通して縁起といふことを述べたのも、親鸞聖人の御影のことを述べたのも儀式そのものが、私たちの行うものでありながら、どうして仏の説法を表現していると言えるのかといふ問題があるからです。

まず、儀式をしているといふことは自分の意志で行動しているわけです。しかし一定の形に従つて行うことによつて、宗祖や釈尊の言葉をみなに伝える法会場の場を作ることが出来るわけです。それは私がいって儀式を行うかといふことと、また違う方向を持つていふわけです。

御信心を頂くといふことは、真実に出遇つて凡夫・悪人として生きるということとです。南無阿弥陀仏と頭が下がる、それがすくいなのです。念仏することによつてすくわれるのではなく、念仏がすくいそのものを示しているのです。阿弥陀

さまと出遇つていふこととです。どこかに阿弥陀さまがいて、「私」が出遇うのではありません。本当に頭が下がったときにいるのが阿弥陀さまなのです。自分が偽物である。凡夫である頭が下がったときにだけ、阿弥陀さまはいらっしゃるのです。しかし、仮に頭が下がってもそれを自分の中に解消してしまい、自分を本物にしてしまいます。そこから聞法が始まるのでしよう。そういう意味では、底の無い迷いの深みに下り始める、それが南無阿弥陀仏です。

儀式に話を戻せば、私たちの儀式は仏や宗祖の前で、念仏聞法している姿をあらわしています。儀式をしてすくわれるのではなく、儀式をしてすくわれる形にしているのが儀式です。だから儀式そのものが仏の説法だといえるわけです。形があることによつて我々の思いを超えて、はたらきを持つていふこととです。だからそこで、法話もできるのです。法話も儀式の中です。法衣を着ていなければ誰とも法話をしてくれとも、法話をしてくれともいけません。そもそもそんな資格はないのです。けれどもみなその形を認めているからできることなのです。そういう安心できる場を与えられているのです。その形の中で役割を果たすといふことが、儀式の執行なのです。私の思いで成り立っているわけではありませぬ。だから儀式を執行する私が偉いわけではないのです。儀式とは我々の考へている以上に、その形といふことに支えられているものなのです。

「真宗儀式の教相」

今回は9月16日です。

(詳細は8頁)

東日本大震災 復興支援活動(報告)

「お念仏が結んでくれた出遇いに感謝」

二十五組 三月寺

しもつま としあき
下間 寿昭

このたびの東日本大震災について、ボランティアとして現地へ赴き、被災地の復興支援に尽力したいという宗派関係者(寺院・門徒)を支援するために、仙台教務所内に「現地復興支援センター」が設置されています。名古屋教区からも現地復興支援センターとの連携のもと、有志の僧侶が順次、被災地へ赴いています。

今回は、さる5月16日から20日までの日程で、被災地で活動された下間寿昭氏に、現地を感じたことを寄稿いただいた。



壊滅的な被災状況を目の当たりにして途方にくれた。
その一方で、東北の空はとても美しかった。

3月11日の震災以来、「被災地に入っ
て何かしたい」と思いつつも、中々踏み
出すことができずに悶々としていた。そ
んな中、知人から被災地入りを誘われ、
僧侶仲間6人で現地入りを決断した。
被災地は刻々と状況が変わると聞いて
いたので、我々よりも以前に現地入りし
た仲間の情報と、仙台教務所に設置され
た「現地復興支援センター」を頼りに「推
進員宅の瓦礫の撤去」、「遺体安置所の訪
問」、「東京・三条教区有志による炊き出
し隊への参加」など、短い日程ながら多
岐にわたる活動を行うことができた。
実際に現地に行ってみると、テレビや
新聞からは伝わってこない360度に広



仙台教区推進員連絡協議会会長
菅野眞一さん

がる壊滅的な状況に言葉がでなかった。
しかしその一方で、東北の自然の美しさ
に驚かされた。そして何よりも、同じ空
間で息を吸い、同じものを食べる中で、
私の中にある「お気の毒な被災者」とい
う固定概念とは違う、生身の人のぬくも
りを感じさせていただいた。

今回、瓦礫の撤去作業をお手伝いさせ
ていただいた菅野さんからこんなお話を
いただいた。

津波の御蔭で、傲慢な私のあり方に
ようやく気づくことができました。
津波に会えたことにもありがとうございます
言いたい。これからも、お念仏して
生きていきます。

自然の中に生きていながら、そのこと
を忘れてしまっている私たち。「自然と
共に生きている『いのち』を改めて見つ
めていきなさい」と教えていただいた。



菅野さんとのご縁を結んでくださった佐藤多恵子さん(左)と
菅野さんの奥さんの貞さん(右)。お茶とお菓子をご馳走になった。

今回、菅野さんをはじめ、本当に多く
の方々の生の思いや願いに触れ、改めて
日頃の自身が問い直されている。
だからと言って、被災地に行つて活動
することが正しいことでも、全てでもな
い。それぞれにできる役割があり、それ
ぞれの形で力を合わせていくことが大切
である。様々な形で人と人がつながって
いけるような社会・教団になることを願
うと共に、その役割の一端を荷ってい
たいと思った。

そして、お念仏が結んでくれた、今回
のご縁に感謝と、この経験を伝えること、
震災を「大変だったこと」として、終わ
らせてしまわないようにと強く思った。

大谷派の戦争協力 「法主」の戦場慰問と宣撫工作

はじめに

日中戦争勃発直後、浄土真宗本願寺派「法主」は中国大陸の戦場慰問旅行をおこなった。これに触発されてか、大谷派「法主」も1938（昭和13）年1月13日から3月9日まで中国華北・華中の戦場・占領地と「満州国」を訪問した。

この「法主」の慰問行は、大谷派の中国に対する戦争責任の基本型を示すものと判断できる。これを分類すれば、軍隊慰問・宣撫工作・神社参拝となるであろう。またこれらすべては『東洋平和の黎明』と題したドキュメント映画で、広く国内で宣伝されている。

一、軍隊慰問

軍隊慰問は、軍病院患者の慰問・部隊司令官への表敬訪問・部隊での「法話」・戦死者「慰霊祭」がその代表である。占領行政がうまくいっていない場所では、軍用列車や航空機での移動、兵隊の警備を受けての移動なども行われていた。

各地での「法主」の移動や宿泊は、陸軍特務機関が執り行っていた。この特務機関は戦闘部隊ではなく、占領地の行政

を行うための部隊であった。その業務は、食糧確保・教育・医療・宣撫工作・軍と官民（傀儡側も含む）の連携調節など多岐にわたっていた。大組織である大谷派の「法主」の慰問行は軍からも重要視され、特務機関が特別の便宜を図っていたのである。これは、軍と大谷派の密接な関係を証明している。



大谷派と日本軍。上海の陸軍病院慰問。
『戦争は罪悪である ある仏教者の名誉回復』
NHK教育テレビ 2009（平成21）年10月12日放送

二、宣撫工作

慰問行に特務機関が大きく関与していることから、慰問行は占領地行政に利すための宣撫工作も重要な目的としている

たことがわかる。

「満州国」では、「満州国皇帝」らの要人との会見が行われた。これは、「日満友好」の演出だけでなく、「満州国開教」の円滑化も目的としていたはずである。当時は、「開拓地開教」として、大谷派の布教所が増加しつつあった時期でもあった。

また、華北や華中でも傀儡となった中国要人との会見が用意されていた。中でも、北京市長と南京自治委員会副会長は、1899（明治32）年3月1日に中国南京に開設された大谷派の「金陵東文学堂」の出身であり、占領者と傀儡、という以上の関係を結ぶことができたのである。これも日本の占領行政と大谷派の占領地侵出にはプラスとなるものであったと考えられる。

三、神社参拝

この慰問行では、「満州国」・華北・華中にあつた神社への「公式参拝」も目立っている。『真宗』の記事では「公式参拝」と「参拝」の二種類の表現があるが、前述の映画『東洋平和の黎明』に記録された場面から判断できることは、神主の先導による参拝を「公式参拝」と呼んでいるようである。戦後の中曽根・小泉首相の靖国神社公式参拝も、神主の先導により参拝している。大谷派もこのような形式を「公式参拝」と呼んでいるのであろう。



「法主」による天津神社公式参拝。神社参拝の映像を見せることで、門徒にも神社参拝奨励を教育した。
『戦争は罪悪である ある仏教者の名誉回復』NHK教育テレビ 2009（平成21）年10月12日放送

おわりに

「法主」の慰問行は二か月にわたる。また、同時期に裏方による慰問行も行われている。これらの慰問行での訪問先・面会者などを詳細に検討することで、単なる軍隊慰問ではない大谷派の戦争協力が見えてくるはずである。同時に、その戦争協力を国内で宣伝した映画の影響についても考察をしなければならぬ。

この慰問行は、今後の大きな研究テーマとなるべき事実である。

（研究員 大東仁）

尾張の真宗史

「親鸞聖人橋之御旧跡」レポート

岐阜県羽島市正木町上大浦^{かみおおら}。木曾川に架かる尾濃大橋を渡り、堤防沿いを少し北へ進むと、「親鸞聖人橋之御旧跡」と刻まれた石碑の建つ河田家の前が出る。

当家は、嘉禎元（1235）年、関東から親鸞聖人が京都に帰る途中に、尾張国葉栗郡大浦郷に立ち寄り2泊3日の逗留をされたと伝える、河田彦左衛門の屋敷跡である。東海地方では「在家唯一」の聖人御旧跡として、地元の人々にはとても親しまれている場所である。

大浦の地は、現在は岐阜県になるが、中世では尾張国であったことがわかっている。この地は、名古屋市にある聖徳寺の開創地としても知られ、寺伝によれば当寺は、聖人の帰洛の際、大浦郷の人々の懇請により、同行していた直弟子の閑善を聖人が残留させ開創したと言う。ただその後、一旦中島郡荏安賀に移るが、天文年間初期に再び大浦郷にもどり、天文9（1540）年には実如上人・証如上人御影や親鸞聖人絵伝が下付され、堂宇も整備充実されていく。そして、同寺に所蔵されるそれらの裏書三点には「尾州葉栗郡大浦郷 聖徳寺常什物」とあり、もともと大浦が尾張国であったことが明らかに示されるのである[※]。

註※ 『名古屋別院史 通史編』（真宗大谷派名古屋別院）第一章第二節、青木忠夫『本願寺教団の展開―戦国期から近世へ―』（法蔵館）「聖徳寺門徒の基礎的研究」参照。

なお、一般に尾張国と美濃国の境については、天正14（1586）年以前は現木曾川より北の古木曾川（現境川）であり、それが同年の大洪水により木曾川の河道が大きく変わり、基本的には現在のようになったとされる。しかし、上大浦の隣字である正木町森新田に所在する栄龍寺の、寛永16（1639）年付の親鸞聖人・教如上人御影、並びに聖徳太子・七高僧御影の裏書には、「尾州葉栗郡西門間庄 大浦森村栄龍寺常什物」とあり、大浦地域に関しては寛永年間までは尾張国とされていたようである。ただ、宝暦4（1754）年付の真如上人御影裏書になると、「濃州葉栗郡大浦森村 栄龍寺 什物」とあることから、この頃までに美濃国に属するようになったのは確かである（『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三〇号「研究所調査記録」参照）。



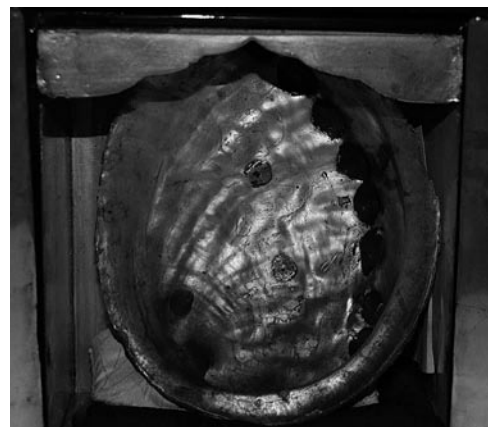
親鸞聖人の糸切り歯を納めた宝塔

さて、この河田家には親鸞聖人の逗留に際して次のような物語が伝わっている。

聖人が河田家に滞在中、聖人が説く念仏の教えに感銘を受けた彦左衛門は、九年母^{ねんぼ}という蜜柑の実を献じた。聖人は大変喜んで食べられたが、種が糸切り歯につかえて、糸切り歯は種がついたまま抜け落ちてしまった。聖人は糸切り歯からつかえた種をはずし握ると、「私の言うことと仏が言われることが同じなら、この種はすぐにも芽が出るでしょう」と言って庭先に投げた。するとその種はみるみるうちに芽を出したと言う。また夜になつて、彦左衛門は聖人のために、遠い伊勢国から取り寄せた特大のあわびを御馳走した。聖人はこれも喜んで、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と念仏を称えながら食べられた。するとそのあわびの貝殻に、「南無阿弥陀仏」の文字と蓮の花が浮かび上がってきたと言う。実際、河田家の庭にはこの時の種から芽を出したと伝える九年母の木があつたそうだが、残念ながら50年ほど前に枯れてしまいい今はない。ただ、聖人の糸切り歯や六字の名号が書かれたあわびの貝殻が伝わり、今でもお内仏に大切に安置されている。

ちなみに「橋之御旧跡」の名称はこの九年母の伝承に由来し、いつの頃からか、蜜柑の古名である「橘」の字が用いられるようになったと言う。

無論このような伝承は、あくまでも空



六字の名号が浮かび上がるあわびの貝殻

想の域を出ないものである。しかしその背景には、河田家の人々が聖人と直接触れあつた深い感動と、耳にした教えを伝えていこうとする強い使命感があつたことを想像させる。つまり法義相統の象徴であつたと言うことができよう。河田家のお内仏には、この他に御代前に蓮如上人筆の小幅の六字名号が掛かり、祖师前側面には証如上人証判の御文（四帖目末尾）の断簡が掛けられている。さらに、本尊の御絵像は少なくとも江戸初期と推定できる方便法身像である。このことは、葉栗郡印食^{いんじき}（現岐阜県羽島郡岐南町八剣^{やっせん}）から天正年間に大浦に移転したと伝える栄龍寺（※参照）とともに、当家がこの地域の真宗信仰の中心となってきたことを示している。栄龍寺の御住職によれば、第二次大戦前までは栄龍寺の報恩講のときに親鸞聖人絵伝を河田家にも運んでいき、そこでも御伝鈔を拝読していたと言う。まさに、河田家が大浦門徒の歩みに

果たしてきた役割には、極めて大きなものがあつたと言わねばならない。

最後にもう一点。大浦地域には、聖人がこの地を立ち去るときに、別れを悲しんだ人々に残したという御影鏡ごえかげがみの伝承もある。御影鏡とは鏡面に聖人の姿が映し出されるといふものであるが、これは、天文10年代末に大浦郷から中島郡富田郷に移転し、さらに濃州三屋、尾州清洲そして名古屋へと移転を繰り返す、前述の聖徳寺に伝えられている。

(研究員 小島智)

河田家〈橋之御旧跡〉

岐阜県羽島市正木町上大浦6-1112

TEL 058-392-4188



研究生実習報告

葬儀つて必要？

伝道スタッフ養成講座に参加して
2011年1月26日

私は、伝道スタッフ養成講座(教区教化委員主催)に参加して、初めて「デイベート(模擬デイベート)」と言われるものを経験しました。これは、決められた論題について、賛成派と反対派の班に分かれて議論するのですが、賛成か反対かは、個人の意思とは無関係に決められるルールなのです。つまり、自分が論題について賛成であっても、反対派の立場として考えなくてはなりません。班ごとに賛成、反対の主張を提示しあい、その主張に対してお互いに議論を深めていくのです。このことよって、論理的に物事を考える力、自分の意見を相手に伝える力、また、対立する立場に立つて物事を考える習慣が養われるそうです。

講座の講義内容は、積尊の涅槃についてでしたので、デイベートの論題は「葬儀は必要か、否か」でした。日頃から私は、「葬儀は必要だ」という立場でしか考えていませんでしたが、今回「葬儀は必要」の立場に割り当てられました。そして、ルールに則って「葬儀は必要ではない」という立場で「葬儀」を考えることよって、初めて見えてきたことがありました。それは、「葬儀は必要だ」と考えていたのは、僧侶である私自身の立場からの押し付けであつたのではないか、人はみなそれぞれに生活の環境が違うので、その人に合った葬儀という形があつ

てもいいのではないか、ということでした。今回の講座で、今まで意見を押し通してきた自分、人の意見をよく聞いてこなかった自分、他の人のことを考えていなかった自分が見えてきました。物事を考

教化センターライブラリー紹介 「世と共に世を超えん」(上下) 松田章一著

暁烏敏といえば、真宗大谷派の宗務総長として真宗同朋生活運動を提唱されたことで知られている。特に晩年は、ほとんど視力を失っていたことから、ご門徒に手を引かれながら法座につき、穏やかに語られる姿をイメージしておられる方も多いのではないだろうか。

しかし本書では、そんな生き仏のようないイメージとは程遠い、赤裸々に生々しい苦悩の人生が記されている。たとえば、金沢大谷尋常中学校では英語の授業を嫌い自ら退校し、京都の大谷尋常中学に編入してしまうのである。しかし、そこで清沢満之との運命的な出会いを果たすこととなる。また、このころの若き日の敏は、性欲に翻弄され、わが身を汚れた存在と思ひ、そこから遠ざけようと悶々と苦しんでいる姿が描かれている。

また、真宗大学時代には、清沢満之の宗門改革運動に参加し退学させられたり(後に復学)、あまりに情熱的に改革を急ぎ、宗派から「異安心」扱いされる。その他にも複雑な女性関係が取り沙汰されるなど、本当に波乱万丈の人生を送ったことが記されている。著者の松田章一氏は、昭和三十年代

え、話をするということとは、葬儀に限らず、あらゆる事柄についても、いろいろな視点から考えることの重要さを気づかせてもらえました。

(第7期研究生 加藤浄恵)

に今まで眠っていた膨大な資料と『暁烏日記』に基づき編纂された『暁烏敏全集』に携わった。そんな著者ならではの視点で描かれた暁烏敏の姿に、同朋会運動の源流があることを知った。それは人間の苦悩の歴史から生み出された信仰運動であることをあらためて確かめさせてくれた。

引用が多く、本文は難解な所もあるが、読み直したくなる本である。是非一読をお勧めしたい。

(教化推進要員 林博行)



INFORMATION

「第8回ハンセン病問題 全国交流集会」に参加して

真宗本廟 2011年4月13日(水)

さる4月13日、「第8回ハンセン病問題全国交流集会(真宗本廟)」において「人間に帰ろう～しんらんさんと考えるハンセン病問題～」というテーマのもと、分科会、記念講演が開催された。「らい予防法」廃止後の私たちの在り方、回復者の高齢化に伴い園をどうするかという問題など、様々な問題が提起された。

会は、ハンセン病問題に関する話と震災に関する話が入り混じる独特な雰囲気であった。記念講演で玉光順正氏は、ハンセン病を日本から根絶しようとする「無らい県運動」は「悪意ではなく、善意によって行われていった」とし、「人間はまじめに間違える」と、その「善意」の危うさを指摘された。「無らい県運動」は、患者に「あきらめ」を抱かせるものであり、大谷派は「善意」による慰問布教によって絶対隔離政策を推し進め、「あきらめ」を抱かせることに加担していった。

パネリストの酒井義一氏は、「人間には3つの壁が満ちている。1つは悪意に満ちた壁。もう1つは無関心の壁。そして最後に善意の壁」と述べ、こ

のたびの東日本大震災において、正義の仮面をかぶる「善意の壁」が特に危うさを持っていると指摘された。

過去から続く現在の課題「ハンセン病問題」、そして新たに現在起こってきた「震災」。この二つに共通する課題として提起された「善意」の裏側には、パネリストの徳田靖之氏が指摘する「『この国難の中でハンセン病問題に時間を割けるか?』というのが役人の本音だ」という問題がある。

国難を乗り切ろうという善意のスローガン「がんばろう日本」の名のもと、無意識のうちにハンセン病問題を「消し去ろう」とする思いが私たちの中にあるのではないかと。それは同時に今に至っても回復者に「あきらめ」を抱かせることになってしまっているのではないかと。

それと同様に、「東京電力の社員が、無理を承知で作業することを強いているのは私たちである」と、ある原発問題の学習会で聞いたことが重なる。私たちが無意識のうちに見ようとせず、消し去ろうとする裏側にはこういった現実がある。

集会に参加し、現在を問う眼をいただいた。

(教化センター職員 小笠原 智秀)



教化センター日報 ■2011年3月～5月

3月1～4日 研究生・実習「別院法話」
2日 研究生・特別
「現代社会と真宗教化」
4日 研究生・教化研修(竹橋太氏)
8日 研究生・実習「真宗門徒講座」
11～18日 研究業務・「平和展」開催

16日 研究生・聖教研修
(荒山淳センター主幹)
17日 HP「お東ネット」会議
25日 研究生・特別「尾張の真宗史」
28日 HP「お東ネット」会議
4月6日 研究生・実習「真宗門徒講座」
14日 研究生・聖教研修
(荒山淳センター主幹)
18～20日 研究生・真宗本廟奉仕団

26日 HP「お東ネット」会議
5月6日 研究生・実習「真宗門徒講座」
12日 研究業務・「平和展」学習会
13日 研究生・聖教研修
(荒山淳センター主幹)
20日 研究生・実習「法話実習」
27日 研究業務・「平和展」学習会

公開講座にご参加ください(両講座とも聴講無料)

◆聖教研修「『正信念佛偈』に学ぶ」※どなたでもどうぞ

講師：荒山 淳(教化センター主幹) 会場：名古屋教務所2階 講義室
期 日：2011年7月22日(金)・9月2日(金) テキスト：『正信偈』(東本願寺出版部刊)
時 間：午後4時30分～6時00分

◆教化研修「真宗儀式の教相」※僧籍者対象

講師：竹橋 太氏(本廟部出仕) 時 間：午後4時00分～6時00分
期 日：2011年9月16日(金) 会 場：名古屋教務所1階 議事堂

■教化センター

〈開館〉 月～金曜日 10:00～21:00 土曜日 10:00～13:00
(日曜日・祝日休館 ※臨時休館あり)

〈貸し出し〉 書籍・2週間、視聴覚・1週間

～お気軽にご来館ください～

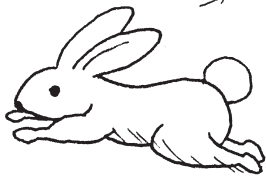
《編集子雑感》

今号は震災に関するテーマ・切り口が多い。中でも、実際に被災地へ赴きボランティア活動を行ってきた下間氏に報告をいただけたことは感謝したい。氏以外で活動されている方や今後の教区内寺院へ良い橋渡しになることを願う。また、大東氏は近年の活動が認められ、中国文物保護基金会より賞をいただいたとうかがった。心よりお祝い申し上げます。

原稿が出そろい、紙面全体を見回してみると、原稿依頼した時に想定していなかった化学反応が起こることがある。紙面同士が互いに影響しあい、想定していなかった効果を生み出すのである。

今号がそれに当たるかは読者にまかせるしかないが、今後も化学反応を起こし続けるジャーナルであり続けたいとおもう。(C)

秋
尊
公



寺報イラストカット集

寺報やチラシなどにお使いください。

お釈迦様の生涯



お釈迦様の生涯



釈尊伝

※あくまでもイメージです。ご了承の上お使いください。

発行/真宗大谷派名古屋教区教化センター (No.77)